教員志望の大学生における「死にたい」に対する認識

○川本静香¹

(¹山梨大学大学院総合研究部教育学域)

キーワード：死にたい・スティグマ

Image to “I want to die” of a university student who hopes to be a school teacher

Shizuka KAWAMOTO¹

(¹Yamanashi University)

Key Words: “I want to die”, Stigma

目 的

日本の自殺死亡者数は、平成10年に年間3万人を超えて以降、14年間にわたり異常事態が継続していた。この間、様々な取り組みが行われ、現在では中高年世代を中心に急増前の水準まで減少傾向となっている。一方で、20歳未満の若年者の自殺死亡率は平成10年の自殺死亡者数急増時からほぼ横ばいの状態が継続し、加えて20歳未満の死因第一位が自殺であるなど、20歳未満の若年者における自殺の問題は、依然として深刻である。

こうした状況の中で、「自殺総合対策大綱-誰も自殺に追い込まれることのない社会の実現を目指して-」（厚生労働省，2017）では、重大施策の12課題の中に「子ども・若者の自殺対策を更に推進する」ことが掲げられ、また、改正自殺対策基本法では、若年者に対する自殺予防対策の推進を目的として、学校における自殺予防教育の導入とその重要性が示されるなど国を挙げての若年者対策が進められようとしている。

このように、若年者に対する自殺予防対策の重要性が謳われ、とりわけ学校での自殺予防教育の導入が期待される中で、その担い手となる教師や将来教師を志望する大学生が、自殺や「死にたい」と言う人に対してどのような認識を持っているのかを把握し、教育現場に自殺予防の考え方を導入する方法について検討することがますます重要となっている。本研究ではそうした観点から、将来、教員を志望する大学生が「死にたい」と言う人に対してどのような認識を持っているのかを探索的に検討することを目的とした。

方 法

協力者 関東圏の大学に所属し、将来、教員を志望している学生22名（男性13名、女性9名、平均年齢20.5歳）

手続きと質問項目 研究の趣旨を説明し、同意が得られた者に対して調査の協力を依頼した。その際、協力は強制ではないこと、また、自殺や自殺といったことについて回答を求めるものがあることを事前に伝え、回答中に気分が悪くなった場合には、途中で回答を中断するよう伝えた上で、調査を実施した。調査では、1. 年齢、2. 性別、3. 教員志望の程度、4. 自殺予防対策に関する研修の受講の有無、5. 「死にたい」と言う人に対するイメージならびに、「6. 死にたい」という人に対して、自分ならどのような対応を行うかについて、自由記述による回答を求めた。

分析方法 5. 得られた自由記述について、KHcoder (ver2.00f, 2015)を用いて分析を行った。KHcoderで形態素解析を行い、抽出された単語から、単独では意味を成さない語を除外するとともに、強制抽出語と削除対象語リストを作成し、再度形態素解析を実施した。今回の分析では抽出後の中から、頻出2語以上の単語を共起ネットワーク分析に用いた。

結 果

共起ネットワーク分析の結果を図1に示す。KHcoderの共起ネットワーク分析では、語と語の結び付きの傾向を図示することが可能である。本研究では、共起ネットワークにおけるサブグラフ検出によって抽出した。

分析の結果、「生きる」「辛い」「苦しい」「治療」「かわいそう」「弱る」「精神」「理由」「言う」という第1グループと、「死にたい」「口に出す」「心」「思わない」「嫌」という第2グループ、「本心」「言葉」「分かる」「かまってる」「自殺」という第3グループ、「死ぬ」「至る」「愚か」「問題」「手段」という第4グループから構成されることが明らかとなった。

図1 共起ネットワーク分析（サブグラフ検出）の結果

考 察

分析の結果、教員を志望している大学生の持つ「死にたい」と言う人に対するイメージは、「精神的な病いや生きる辛さに同情する」もの、「本心でない」というもの、「口に出しているだけで嫌な感情を引き起こす」もの、「問題解決の手段として愚かである」というものといったパターンがあることが見出された。これらのイメージの多くは、自殺予防においてスティグマとされる内容と同様であるため、学校での効果的な自殺予防教育の導入に向けて、教員志望の大学生における自殺予防教育を実施する必要があると考えられた。